

himself.

己の妻を賞賛せざる者也。自を辱しむるなり。

Home love is a woman's very life; a man may live without it.

家庭的愛は、婦人の眞の生命なり。男子は、殊これなく而生疏し得べからず。

He who has a bad wife can expect no happiness that can be so called.

鶏の鳴く時と其の駄也。されども幸福なるゆのを期望するるやせ候。

It is a sorry house in which the cock is silent and the hen grows.

社禰縣也。此處の聲い家也。悲しむべく家なり。Neither reproach, nor flatter thy wife where any one hearth or seeth it.

他人の見聞する所にては、決して、汝の妻と非難し、又は、彼女に呵諭するなれ。

Wisdom in the man patience in the wife bring peace to the house, and a happy life.

夫に智あり、妻に忍耐あるべし。家庭に平和と幸福の生活が来るべし。



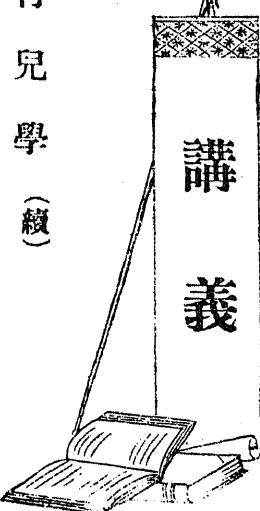
講義

義

育兒學（續）

中村五六

◎新歯の生ぐたる後の注意、初で乳歯の生ぐ出るは、健康なる幼兒に於ては、生後凡そ六七個月やむべからぬも、躊躇なる幼兒に在りては、十四



個月経ても、猶ほ生へぬのがあります。併し、斯く歯の生へ方後るゝは、あながち身體の弱さのみに限らず遺傳によることもあります。既に此の期に至りますれば、母親によき乳が十分ありましても、豫て断乳の用意として、一日に一度か又は二度か試して、母乳の外の食物、即ち人工食物を交せ用ふるを、本来の規則といたします。人工食物には、牛乳を普通にして最も宜しどし、又かたくり、麦なびの粉類を軟熟となしたるもの、或は肉類の羹汁を製り、之に適宜の粉類、砂糖、食鹽をませ合せ、さら／＼に煮こなしたものなきを用ひます。

斯く乳歯の出初めたるは、體内の胃などもだんぐりの他に堪ふべき有様にならざる印ともなりますれば、人工食物を與へ始ひるは、全く此等の自然の徵候によるべきことにて、唯、月日の數のみにて、決して

定むべきものではあります。故に右に舉げし如き人工食物を交せ用ふるは、つまり種々の食物を用ふるときの準備でありますれば、其の撰擇、調理、分量、用法等によく注意せねばなりません。

人工食物を用ひ始めたるときは、よく幼兒の有様に氣を付け、何等の病もなく、生育もよきときは、漸次に、之を與ふる度數を増し、母の乳を與ふる分量は之に應じて減じ行きて、月日の移る間に漸く断乳の運を回らなければ、其の期に至りて、聊も断乳に困難はありませぬ。且つ又、かくのことく、漸次に乳を離れますときは、母も兒も、身體の爲に露はせの害あることもありませぬ。然るに、此等の注意を怠るためか、乳離れ児とて、おはれ身體の衰弱せる兒とも、世には跡からぬやうに思ひます。

● 断乳の時期、幼兒の断乳の時期は、母の健康及

事情と、兒の發育及健康との二様の狀態に從ひて、自ら遲速の別がありますれば、月日を限りて、其の期を定むべきではあります。

母の身體健康にして、乳も澤山あり、兒も又發育異常に、齒生へて食物を變化して支障なきを證する場合には、第九ヶ月若しくは十ヶ月にして、全く乳を離せば、一定普通の法則であります。故に幼兒は、たゞひ健康なりとも、未だ此の期に至らずして乳を離せば害となり、十一ヶ月を過ぎても、尙ほ乳を與ふれば、却て、母と兒とに益あることはありません。されどかと思ふときは、猶ほ、二三ヶ月の間は、母の乳を幼兒生來孱弱にして、齒も生へず、人工食物に堪へがた思へなければなりません。殊に齒の生へたるころは、幼兒によりて、腹痛、下痢或は熱氣などを發することありますれば、此の時に乳を離し、他の食物を與ふる

ときは、胃腸を傷ひ、病を重ねることになりますれば断乳の時期に至りましても、病の癒るまでは、姑く乳を離すことを見合はすべきことであります。

断乳の時期は右に述べましたる事情によりて、凡そ定まれることであります。世には、久しく乳を與ふれば、幼兒はますます強く、早く乳を離せば、いよいよ弱きものなりと信じて、二年間の乳を與ふるは通常にして、甚しきは六七年も哺乳を續くものあり、又愛に溺れて、乳を離したき母親もあり、或は貧しきもの、子澤山、再妊の憂なしと思ひし、乳のあらん限りまで之を飲しむるものもあります。此等の如きは母はもとより、幼兒まで、却て健康を害して病を引き出し、生涯不幸に陥ることになります。是れ、長く乳を與ふるときは、母親は身體の精を吸ひとられ、爲に病に罹ることあり、母親が既に病に罹るときは、其の

乳^ム悪^キしくなり、水氣^{スイキ}多く、養分^{ヨウブン}は味と共に薄^{アヒル}くなり、之^{シテ}を飲^メめる幼兒は、身體の生育^{セイブツ}宣^シからず、諸種の疾^{ヤマニ}病^{ヨウ}を起^スすこと、また疑^シなきことあります。

終^{ヒテ}に一言添^ヘへ置^マくことは、幼兒を戸外に出^シし新鮮^{シンゼン}の空氣^{クウキ}中に運動^{ムダク}せしむることは、何^レの時^にも、其の健康^{ケンチヤウ}の爲^{シテ}最も宜^シしきことあります、特に斷乳^{センル}の時^に期^クに至^リては、食物の消化^{コハル}を弊^シめ、病^{ヨウ}を未^だ發^ハに防^ガきて、益々^{ますます}育^カをよくする爲^{シテ}には、頗^リなき功^{コト}益^{ヨウ}あるといふことあります。

史傳 ヴィクトリア女皇 (つとみ)

鄭越生補譯

かくて、女皇陛下には、追々と御壯健に、御肥立ち遊ばしまして、ときどきこの愛らしき、薔薇色の小顎に、無限の愛嬌^{あいきょう}をたへて、笑ませたまやうに、なられましたので、父公爵の御鍾愛^{ショウアイ}は、また一入でございまして、殆^{んど}んと、しばしも御懷^{おんも}をはなしたまひし事なく如何に御応懇の方々にも、女皇を抱^{いだ}かせたまはず、唯しばへ公爵家に出入をいたし居りまして、殊の外公爵一家の、御信仰^{ごしんこう}あつき。或る僧正のみは、折々女皇を抱^{いだ}き奉るといふ、無上の名譽^{めいよ}を、うくること

